

[論 文]

『カタカナ語』を考える
～使われ方と理解のされ方と～

Studies of *Katakanago*
About Its Usage and Understanding

吉 川 喬
Takashi Yoshikawa

I. はじめに

冒頭、今年知り合いの言語学者から届いた年賀状の一部を引用することにする。

「21世紀は、新聞を読むのにも『カタカナ語辞典』や『新語辞典』が必要になるかもしれません。昨年、10月20日の朝日新聞（東京版）の朝刊1、2、39面に次のような『アルファベット略語』が出ていました。

①CD	②EU	③IT	④G7	⑤GM	⑥WFP
⑦PCB	⑧KSD	⑨M ^{マイ} 米	⑩ASEM		

①、②、③はこのままで、④以下は日本語が添えてありました。その日本語は別面に書き出してあります。」というものである。

果たして、これらのアルファベット略語は一般にどの程度理解されているのであろうか（この知り合いの言語学者は、新聞の読者がどこまで理解できるのかを心配しているのであるが）。また、教育現場に詳しいある知り合いは、同じく年賀状で次のように言う。

「先頃のある会合で、国文学の先生とシンガーソングライターが日本語の歌詞と詩を壊してしまったということで意見が一致しました」と。この人は、最近の歌に、カタカナ語の乱用が目立つことを指摘しているのである。そして、カタカナ語が日本語の体系を崩し、日本語が本来もっている美しさを壊していると嘆いているのである。

こうした指摘は、新聞の投書欄でも最近よく目にすることがある。

「私の年代でも、カタカナ語の理解に苦しむことがある。私より上の年代の人達は、もっと多くの方が苦しんでいると思う。新聞などでは、前後の文章から何となく意味を取っていたが、正確ではない。今度、小泉純一郎厚生大臣の強い指示で「カタカナ語追放」（後述）に乗り出したとの記事を読み、うれしくなったものである。…。数え上げたらキリがないほどのカタカナ語。追放大賛成。美しい日本語があるのだから」（日立市・藤原美緒子・会社員55 朝日9.6.21）

「カタカナ語は、老人や子供には解釈できない言葉が多い。最近のテレビや新聞にしても難

解なカタカナ語が氾濫し、英語の教育を受けていない戦前派にとっては、大きな悩みとなっている。難しい政治用語などは、カタカナ辞典に頼ることがしばしば。こういう場合、解説をつけるとか、日本語で分かりやすく説明を加えていただきたい。…。」(佐伯市・島田忠治・書道教師75 大分合同9.6.15)

「…。カタカナ語の氾濫は今、抗しがたい勢いのように見える。しかし、本当にそれでいいのかと疑問を持ち、もんもんと苦しく感じている。飛躍かもしれないが、『裸の王様』というあの有名な童話を私は連想する。実際に裸の王様を通るのに、裸と見える者は愚か者だというペテン師にみんなだまされているこっけいな話。カタカナ語の氾濫はまさに裸の王様だ。すでに外来語として通用する語はそのままいい。しかし、大部分の人が分からないカタカナ語を得意げに話したり書いたりするのは、思いやりの欠如、または率直に言って虚栄心の表れ、と言いたい。本当に理解を求めるのであれば通りのよい豊かな日本語を使うべきだ。…。」(宮崎市・川越一徳・無職60 朝日12.3.16)

これらの投書はいずれももっともであり、筆者も文句なく納得させられるものである。

筆者は、かねがね上記のアルファベット略語の使用を含め、日本語として使われる多くのカタカナ語(外来語)にいささかの疑問をもち研究を継続している。この研究報告はその一部である。

ここでは、いわゆるカタカナ語を中心に報告を進めていく。

Ⅱ. 『カタカナ語』とは何か

『カタカナ語』という言葉は国語辞典の見出し語にはない。言うならば外国語・外来語であろうが、ここ10数年、多くの人がカタカナ語ということを口にし、外来語という言葉を使わなくなった。また、書店には、カタカナ語を解説したさまざまな種類の「カタカナ語辞典」が並んでいる。

冒頭の言語学者の年賀状ではないが、すでに数年前から新聞はカタカナ語辞典がなければ読めない時代に入っているといっても過言ではない。新聞だけではない。放送もしかり、雑誌もしかり。マス・メディア全般について、このことは言える。

冒頭の三つの投書と同様、次の新聞の投書もまたそのことを証明している。

「情報化社会の一員になって『カタカナ語』対策にポケットサイズの『カタカナ語早引き辞典』を活用している。生活情報と言えは何と言っても欠かせないのが新聞である。したがって、私にとって新聞とは、今日から明日へと生きがいの橋渡しをしてくれる大切なものであるが、読むうちに『カタカナ語』につまずくことばかりである。…。新聞は国民の生活必需品であって国民の先導者であり、牽引車でもあると信ずる。高齢者にもより楽しく読める新聞であるために、スクラップできるキーワード程度のスペースに適時『カタカナ語』解説をお願いしたい」(北九州市・河野林治・無職71 朝日新聞 9.10.16)

一般に動植物などを表記する際にカタカナを用いることがあるが、それは、この報告でいう

『カタカナ語』を考える

『カタカナ語』ではない。昨今、言われるカタカナ語は、主として外国語（外来語）、または和製英語（和製洋語）の類いである。

記録によれば、日本に最初に入ってきた外国語（中国語からの漢字は除く）は、ポルトガル語であり、室町後期16世紀の半ばである。

そのとき、日本人はこのポルトガル語について二通りの表記を試みている。

一つは、「合羽 (capa)」「歌留多 (carta)」「加須底羅 (castella)」「天麩羅 (tempero)」など原音に近い漢字を当てて、なおかつその物を何とか漢字でイメージできるようにしたもの。

もう一つは、「煙草 (tabaco)」「硝子罎 (frasco)」など漢字の表音は違うが、漢字に意味を持たせてその物を表現したもの。このように、先人は外国から新しく入ってきた物を漢字だけで表記する努力を積み重ねている。この段階で、外来語をカタカナで表記するやり方はまだない。

その後、江戸時代にオランダ語が入ることにより、ここからカタカナ表記が出現する。江戸の蘭学者・新井白石がこのカタカナ表記を取り入れたと言われている。

つまり、従来の方式（漢字）で表記することを試みる一方、カタカナだけで表記するようになるのである。

オランダ語について言えば、「珈琲 (koffie)」「護謨 (gom)」「麦酒 (bier)」「洋燈 (lamp)」などは、従来の方式で漢字による表記を試みたものであり一方「ドック (dock)」「コルク (kurk)」「ランドセル (ransel)」「オルゴール (orgel)」などは漢字の表記がない。

いわゆる外来語であるこれらの言葉はカタカナで表記されることが多いが、『煙草』や『麦酒』は今も漢字がよく使われ健在である。

江戸時代以降、時を経るにつれて外国からさまざまな“物”や“考え方”が入ってきて、その都度、漢字による表記が試みられるものの、定着しなかったりうまく合致しなかったりと、問題を抱えながらカタカナ表記が多く採用されてきたと言えそうだ。というよりは、隣りの中国が漢字だけでさまざまな表記の工夫・努力を重ねているのとは別に、日本にはカタカナという便利な文字があったということがある意味で幸いしたと言えるのであろう。

ところで、今、いわゆるカタカナ語がどの程度日本語の中に入っているのだろうか。国語辞典に占める割合でみると……

今、一般に使われている小型の国語辞典（収録語数は4万から5万語）の場合、本来の外来語も含めカタカナ語の占める割合は7%から8%である。平成5年2月に出版された集英社の『国語辞典』（収録語数は約9万）は約13%。この時、国語辞典の中にカタカナ語の占める割合が初めて二桁になったとマス・メディアが大げさに取り上げた。が、同じ年の6月に出版された三省堂の『辞林21』は、収録語数15万のうちカタカナ語は約22%にもなる。つまり約3万3千語がカタカナ語である。国語辞典は全体の収録語数によっても違いはあるが、これら辞典の変遷で見ても日本語の中のカタカナ語は年を追って増えてきていることが分かる。

辞典の編纂者に言わせると、辞典に採用されるカタカナ語のうちの多くはいわゆる専門用語であり、それぞれの専門分野で使われる限り特に問題はない。が、原語とは違った意味合いで使われるカタカナ語、また原語に似せて作られたいわゆる和製英語（和製洋語）などが、日本語の体系を崩

す原因を作っていると指摘される。そこにカタカナ語の問題があると言えるのである。

この報告で言うカタカナ語は、「①外国語（洋語）をそのままカタカナ表記に代えるもの」「②外国語には本来ないが、ありそうな言葉をつくる、いわゆる和製英語（和製洋語）」である。

①については、江戸時代以前、多くの先人たちが試みた漢字で表記することが難しいものを、日本人が発音しやすいようにカタカナを当てはめたとと言えるが、時に本来（英語もしくは他の言語）の言葉がもっている意味合いと違った日本語としての意味を持たせている場合があり、そこにいささかの問題が生じていると言えるだろう。

また、②については、まさに日本的な感覚で言葉を合成したり原語を作り換えたりした言葉で、その言葉の持つ問題点をその言葉の原語圏の人々から指摘されているのである。ある意味でカタカナのもつ感覚的な新しさ、格好のよさなどからもてはやされ、これらの言葉はかなりのスピードで定着して行く。

ただ、①②を含めて考えると、新しい“物”や“考え方”について、どうしても日本語に置き換えることが難しいものは別にして、安易にカタカナ表記（発音）を採用すると、日本語そのものの良さを崩していく可能性が無きにしも非ず。新しい言葉（カタカナ語）を採用することにより、それは語彙を増やす一方で表現の貧弱さを生み出して行くことになる。そのことが本来の日本語の持つ語彙の豊かさ、また美しさを失わせる原因を作り出すことにもなりかねない。

ところで、各種言葉に関するアンケート調査の結果を見ると、現在、日本人の8割を超える人が「日本語が乱れている」と指摘している。その乱れの原因として、“流行語”“敬語”“若者言葉”“女性の言葉”などが上げられるが、これらと並んで“カタカナ語”も乱れの大きな原因の一つとして上げられているのである。

Ⅲ. カタカナ語はどのくらい使われているのか

ところで、文化庁が平成12年1月に実施した『国語に関する世論調査』（全国の16歳以上の男女約2,200人が対象）によると、「日常、外来語（カタカナ語）の使用が多い」と感じている人が84%（「よく」52%、「たまに」32%）もいる。この調査ではさらに「外来語を混ぜて話すこと」を36%が「好ましくない」と答えている（「好ましい」13%、「感じない」49%）。「好ましくない」理由として、「外来語は分かりにくい」「日本語の本来の良さが失われる」「言葉が乱れて日本文化が退廃する」「体裁の良さだけを追っている」などが上げられている。私たちが通常目にし耳にするカタカナ語は、元はその多くがマス・メディアを通してのものである。さらにその出所を質せば、それは役所を中心とした専門分野でありそれをマス・メディアが取り上げ、マス・メディアを通して一般の人々が目にし耳にすることによって慣らされ使うようになって広まっていくと言われている。

そこで、今マス・メディアがどの程度カタカナ語を使用しているのか、大分合同新聞を例に調べてみることにする。

以下は、大分合同新聞の平成12年8月1日から10日間の紙面に表れたカタカナ語である。取り上げた紙面は、政治・経済・社会・海外・地域・文化であり、ラジオ・テレビ欄や告知欄、スポーツ面、広告欄は対象外とした。対象となる一日のページ数は平均して15ページである。

『カタカナ語』を考える

この結果、紙面に表れるカタカナ語は異なり語数で715、延べでは3,675語となった。一日平均71語、延べでは367語となる。これを以下のように、行ごとにまとめてみた。

〈表1〉

行	異なり語数	延べ語数	特に使用頻度の多い言葉
ア行	99	490	イベント(50) オープン(36) ウォーキング(22)
カ行	98	582	グループ(75) ギャラリー(30) ゲーム(29)
サ行	112	673	センター(84) システム(73) スタート(48)
タ行	87	443	チーム(52) ダム(33) テーマ(29)
ナ行	16	87	ネットワーク(25) ニュース(15) ニアミス(11)
ハ行	181	764	ボランティア(64) ホテル(42) パソコン(25)
マ行	51	377	メンバー(64) メッセージ(33) メーカー(25)
ヤ行	3	18	ユニーク(11)
ラ行	56	197	リサイクル(22) リストラ(14) レベル(11)
ワ行	9	28	ワンタッチ(12) ワークショップ(6)
合計	712	3,659	

() の数字は、延べ回数

〈表1〉で見るとおり、使われる言葉は、頭文字つまり日本語の行ごとに語数にかなり違いがある。多いのは、ハ行・サ行であり、ついでア行・カ行。ラ行・ナ行は比較的少なく、ヤ行ワ行は極端に少ない。

この10日間を個々の言葉で見ると、使用頻度の多いのは、〈表1〉にある通り、「センター(84回)」「グループ(75回)」「システム(73回)」などであり、次いで、「ボランティア(64回)」「メンバー(64回)」「イベント(50回)」となる。ここに示した使用頻度の高い言葉は、いずれも日本語化した言葉でありその使用に問題はない。つまり、これらの言葉は一般的によく使われる言葉であり理解されやすい言葉である。読者が新聞紙上で目にして、特に戸惑うことはなさそうだ。

次に、行ごとに頭文字で言葉の数を個々に見ていくことにする。

〈表2〉

ア・37種 152語	イ・11種 121語	ウ・6種 33語	エ・27種 65語	オ・18種 119語
カ・21種 105語	キ・17種 86語	ク・23種 153語	ケ・5種 63語	コ・32種 175語
サ・18種 102語	シ・35種 215語	ス・46種 222語	セ・7種 119語	ソ・6種 15語
タ・16種 87語	チ・11種 93語	ツ・1種 3語	テ・27種 154語	ト・32種 106語
ナ・5種 5語	ニ・4種 34語	ヌ・0種 0語	ネ・2種 36語	ノ・5種 12語
ハ・66種 231語	ヒ・17種 44語	フ・60種 207語	ヘ・20種 71語	ホ・18種 211語
マ・19種 105語	ミ・8種 38語	ム・1種 11語	メ・17種 182語	モ・6種・41語
ヤ・0種 0語		ユ・3種 18語		ヨ・0種 0語
ラ・10種 20語	リ・24種 112語	ル・4種 13語	レ・12種 33語	ロ・6種・19語
ワ・9種 28語				

カタカナ言葉の使用については、日によって(ニュースの内容によって)違いはあるはずだが、恐らく〈表2〉に表れている傾向にそれほどの違いはないと思われる。

ただ、中には、全く理解できない言葉も登場する。

以下の言葉は、一般にはあまり馴染みのない言葉ではないだろうか。この10日間の記事の中に表れた言葉で、筆者も日本語としての解釈が十分ではない言葉、初めて目にする言葉を以下にいくつか取り上げてみた。

〈表3〉

エコ・ステーション	エコ・サポーター	サバイバル・パッケージ
スター・ウィーク	セーフティ・ネット	デジタル・ディバイド
トーク・セッション	ハイブリッド・カー	フード・スタンプ
ピア・カウンセリング	ペイオフ	ヘルス・フィットネス・フォーラム
ポータル・サイト	マリラ・キルト	マリコン レイトショー など

ちなみに、〈表3〉にある言葉の中で、手元にある『コンサイズ カタカナ語辞典』(三省堂'94.9.10初版)に出ているのは、「エコ・ステーション：(和製英語)電気自動車やメタノール自動車などのエネルギー補給場所」、「ハイブリッド・カー：混合動力車。2種以上の動力源を使用する自動車」、「ペイオフ：支払い、支払日」、「レイト・ショー：(和製英語)夜遅い時間に始まる興業」の四つである。

他の言葉は、少なくともこのカタカナ語辞典には載っていない。が、概ね前後の文脈の関係で想像がつくか、あるいは括弧の中に日本語の解釈が付けられているので何となく理解はできる。

が、中には比較的新しい(と思われる)固有名詞もある。

例えば……

☆『エコ・ステーション』：カタカナ語辞典に出てくる本来の意味とは違うが、記事の中では「空き缶回収機」、もしくはそれを置く場所とされている。最近では、この種の使い方が目立つようだ。また、エコ(エコロジー ecologyの略)を頭に冠した言葉が最近よく使われるが、このエコを冠した言葉を作り過ぎていると言えなくもない。

☆『サバイバル・パッケージ』：記事には、…神戸市東灘区消防署が作成した震災時の冊子「サバイバル・パッケージ」…とある。サバイバル(survival)は、英語の本来の意味では「生き残ること、またその技術」であり、また、パッケージ(package)には「ひとまとめのもの」という意味がある。つまりこのことから、「サバイバル・パッケージ」という言葉は「災害時に備えた注意事項をまとめたもの」という解釈ができる和製英語ということになる。感覚的に分からないわけではないが、言葉として定着するとは思えない。

☆『エコ・サポーター』：記事には、…こども達は、県のエコ・サポーターの〇〇さんの指導で体験学習を…とある。エコ、つまりエコロジーは本来「生態学」または「生態系の中

心とする動植物との関係を研究する」ことであり、最近では環境問題にからめて使われる言葉である。つまりこの場合は、環境問題を研究する人、もしくは環境問題に取り組む人とも解釈するのであろう。流行の和製英語と言っているだろう。「エコ」はこの種言葉として定着していくのであろうか。

☆『ピア・カウンセリング』：記事には、…障害者自身が他の障害者の相談に応じる「ピア・カウンセリング」講座が開かれる…とある。ピア・カウンセリングは「同じ職業や障害もっているなど同じ立場にある仲間どうしによって行われるカウンセリング」（『デイリー新語辞典』三省堂 '00.7.20 初版）であり、めったに目にし耳にする言葉ではないが、記事を読めば何となく理解できる言葉と言え。ちなみに、ピア (peer)は英語で仲間・同等の意（『新クラウン英和辞典』三省堂 '91.12.30第4版）。

このほか、まさに作られた言葉として次の言葉をあげることができる。

☆『スター・ウィーク』：なんのことはない、ある町で星を観察する週間を設けようというもの。スター(star)が星と分かっていても、説明を聞かないと理解できない言葉とならないだろうか。スター、つまりタレントの週間と誤解されかねない。

☆『ポータル・サイト』：記事には、…ポータル・サイト（インターネットの入り口）を開設…とあるので、インターネットに親しんでいる人には理解できる言葉と言えだろう。ポータル (portal)は英語で門・入り口の意。「インターネットでウェブページを見る際に入るウェブ・サイト」（『デイリー新語辞典』三省堂）。

☆『マリコン』：記事には、…マリコンからゼネコンに脱皮したいと…とある。ゼネコン（ゼネラル・コントラクター general contractor）は、経済関係の記事にしばしば登場する言葉であり、一般には総合建設業者と解釈されている。マリコンは、このゼネコンにからめて、マリーン（海 marine）とコントラクター（契約者、請負人）を合わせた作られた言葉である。記事には、「海洋土木」とある。これらは、新しい言葉でもありまた一般にはまだなじめない言葉と言えだろう。

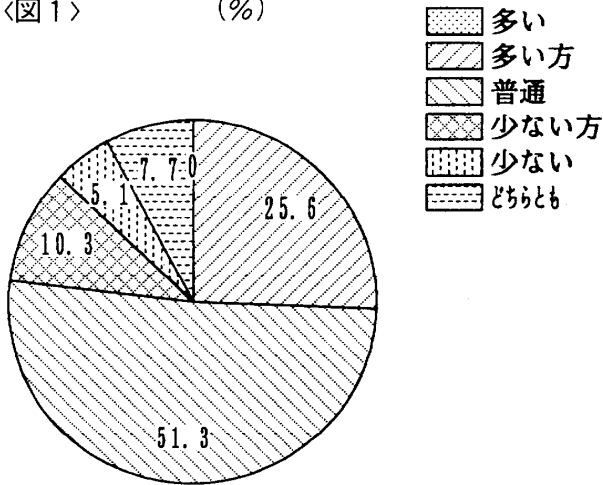
ところで、マス・メディアと並んで役所はカタカナ語を使い過ぎると一般に言われることがある。実際はどうなのか。そこで、筆者は大分県内各市町村で広報を担当する人を対象にカタカナ語に関するアンケートを平成12年8月に行った。

対象は、県と58市町村であり、このうち39の自治体から回答を得た（回答率66.1%）。質問項目は、大きく分けて4項目、更にこまかく14項目について聞いている。ここでは誌面の都合上、その一部を紹介するにとどめる。

回答を寄せた市町村広報担当者たちの80%が、前述の文化庁の調査と同様に世間一般のカタカナ語の使用は「多い」（「多い」36%、「どちらかというとも多い」44%）と見ており、さらに、マス・メディアが使用することについても、85%の人が「多い」（「多い」39%、「どちらかというとも多い」46%）と見ている。そこで、次の質問になるのだが…。

★一般的に役所はカタカナ語を使うことが多いと言われるが、あなたは思うか

〈図1〉 (%)



各役所のカタカナ語の使用については、ほぼ半数が世間一般並の「普通」だと答えている。が、「多い(0%)」とは言わないまでも、その多さを認める人が26%もいる〈図1〉。

自治体からは、さまざまな新しい施策が打ち出される。それは、国の各省庁の方針にのっとったもの、あるいは各地方自治体独自のものとさまざまだが、そこにカタカナ語が使われることが多いと考えられている。使わざるを得ないということもある。

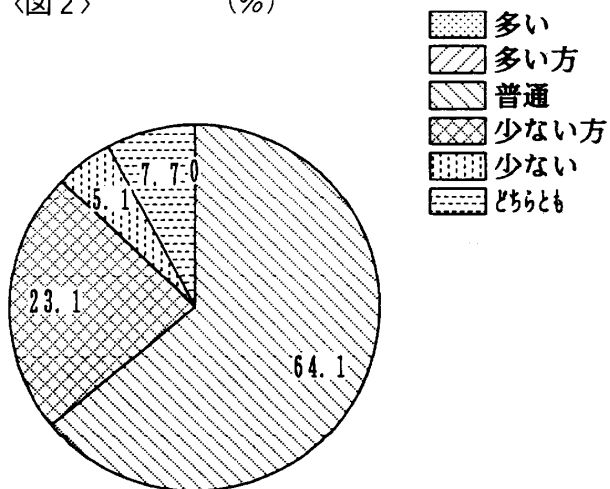
なぜ、カタカナなのか。それは、新しい施策などの元の多くが欧米諸国のそれになっているからではないだろうか。そのままではないにしても、似たような施策であれば、元の言葉をどこかに取り入れる、ということである。

〈図1〉で見る、役所勤めの人が「普通」と答えることについて、誤解を恐れずに言えば、これを一般の人の感覚に置き換えると、おそらく「どちらかというも多い」という回答になるのではないかと。同じように、「どちらかというも多い」は「多い」と置き換えることもできなくもない。

市町村広報担当者の役割は、市町村民に各自治体が持つ情報を広く知らせること、しかも、分かりやすくである。そこに盛り込まれる施策や考え方などを広報する際に、カタカナ語がどの程度使われているのであろうか。次に、そのことを聞いてみた。

★自分が担当している広報誌(紙)はカタカナ語の使い方は多い方でしょうか

〈図2〉 (%)



役所は一般にカタカナ語を使い過ぎるといのが世間一般の見方であるが、〈図2〉で見る限り、64%が「普通」と答えており、大分県内の各市町村広報誌に関しては、問題はなさそうだ。さらに、「少ない方」という答えが23%もあるのは、それだけ、広報誌の担当者は住民の立場を考え、分かりやすい広報誌作りに意を用いていると言える。カタカナ語が増えつつある現在、広報担当者の気の使いようが見えるようだ。

ただ、ここに表れた結果について、先にも触れているがうがった見方をすると「普通」という答え方は、一般の人の言い方、見方にすれば「やや多い」に近いということにはな

『カタカナ語』を考える

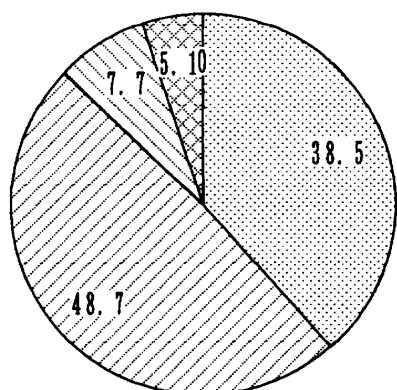
らないだろうか。

自分が作る広報誌については〈図2〉のような結果になったが、次に、他の広報誌についてそれぞれがどう見るかを、聞いている。

ここでは、67%がカタカナ語の使い方は「普通」だと答えており、他の質問項目についても、一部「多い方(3%)」という指摘があった以外は〈図2〉とほぼ同じような結果が出ている。が、実際にはカタカナ語を使わざるを得ない場合が多々あるはずである。担当者は、そのことをどう考えているのか、それが次の質問である。

★カタカナ語を使うことについて気にすることがありますか

〈図3〉 (%)



- いつも気にする
- 時に気にする
- ほとんどしない
- まったくしない
- どちらとも
- 答えられない

「いつも気にしている(39%)」と「時に気にすることがある(49%)」を合わせると88%にもなる。

〈図3〉のように、担当者としては常に「気にしている」ことになるのであるが、実際にカタカナ語を使う場合はどうするのか、この点を次に少し詳しく聞いている。

〈表4〉の結果を見るかぎり、市町村広報の担当者は、住民の立ち場に立った編集心がけているということが分かる。

すなわち、「新しい言葉は必ず日本語で説明をつける(18%)」「分かりにくい言葉は常に日本語で説明をつける(15%)」「聞き慣れないカタカナ語はなるべく使わない(33%)」などを合わせると70%近くになることで、広報担当者の配慮のほどがうかがえるのである。

「新しい言葉でもそのまま使う(3%)」「分からないかもしれないと思いながら使ってしまう(4%)」というのは、ゼロに等しいと見ていいだろう。

★広報誌(紙)でカタカナ語を使う場合どのように使いますか

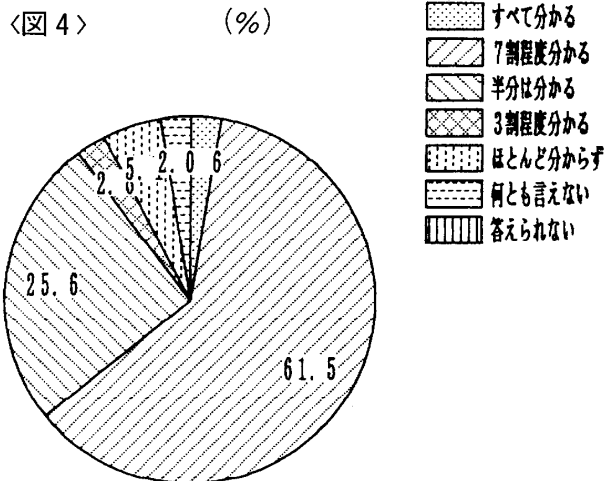
〈表4〉

① 新しい言葉でもそのまま使う	2.7%
② 新しい言葉は必ず日本語で説明をつける	17.8
③ 分かりにくい言葉は常に日本語で説明をつける	15.1
④ 聞き慣れないカタカナ語はなるべく使わない	32.9
⑤ 日本語があればできるだけ日本語の方を使う	27.4
⑥ 分からないかもしれないと思いながら使ってしまう	4.1
⑦ 特別に考えることはない	0.0

IV. カタカナ語はどこまで理解されているのか

カタカナ語の理解度については、人によって大きな差があると言えるような気がするが、この点、市町村の広報担当者はどうか。次の質問でそのことを聞いている。

★一般に使われるカタカナ語について、あなたの理解度はいかがでしょうか



この質問は、マス・メディアで使われているものも含め、日常、目にしたり耳にしたりする言葉すべてについて問いかけている。さすがに広報担当者と言うべきか。「7割程度分かる」人が6割を超えるというのは、頼もしい限りである。逆に言えば、自分は「分かる」からこそ安易に使わないということにもなるのかもしれない。

このことに関連して、次の新聞の投書は興味深い内容と言える。

「川崎市が市政モニターを対象に591のカタカナ言葉の理解度を調べたところ、9割以上を注釈なしで分かると答えた人は2%しかいなかったという。明治以降、日本人は『哲学』『共和国』『銀行』など、外国語から翻訳した多くの造語を世に送り出してきた。それに比べて、現在は、安易に外国語に頼り過ぎているように思える。外国語の単語を使うのが知的で、しゃれているという考え方が依然根強いのも困ったものだ。カタカナ言葉の乱用をこのまま続けて、果たして日本語の将来は大丈夫なのだろうか。役所などは、国民や住民の意見を広く集めるなどして、分かりやすい日本語表現を考えてもらいたい。」(厚木市・田中久直・無職79・読売10.9.17)

もっともな内容ではないか。大事な情報を伝達するために使われたカタカナ語が理解されていないことへの問題点の指摘ということになる。

使われたカタカナ言葉が例え理解されたとしても、次の投書が指摘するような問題点もある。

「間違った英語の使い方がしばしば指摘されているが、いっこうに改まる様子がない。日本人が多く誤用し、かつ目立つのは、本来は頭がいいという意味の『スマート』を、格好いいとか体形がスリムであるという意味で使っていることである。そのほか、幼稚であるという意味の『ナイーブ』を繊細とか純粹という意味で使っている。したがって「ナイーブ」と言われたら喜ぶどころか怒らなければいけない。また、名詞・形容詞・副詞などの誤用として、セーフティドライブ(正しくはセイフドライブ)、ビューティー・アンド・ヘルシー(正しくはビューティー・アンド・ヘルス)。定着してしまった「アイドリング・ストップ」運動。これは、『ストップ・アイドリング』でなければむしろ反対の意味であることをどれだけの人が気づいているだろうか。『ハローワーク』にいたっては何をか言わんやで意味不明外国語もどきである。立派な『官製日本語』としてみるほかないのだろうか。残念なのは、このような誤用を新聞・

『カタカナ語』を考える

テレビなどで相変わらず続けていることである。少なくとも、新聞で間違った『スマートな…』という表現を見ることがないように望みます。」（長崎市・医師・賀来俊50 朝日11.7.14）

ところで、市町村広報者に対するアンケートで、日常よく使われると思われるカタカナ語について、いくつかの質問を試みている。これらの言葉は、市町村広報誌にもしばしば登場する言葉である。

取り上げた言葉は、以下の20語である。

〈表5〉

①アクセス	②アセスメント	③アメニティー	④オンブズマン	⑤ガイドライン
⑥クローン	⑦コンセプト	⑧コンセンサス	⑨シミュレーション	⑩シーリング
⑪スキーム	⑫デポジット	⑬ビジョン	⑭ボランティア	⑮ホームヘルパー
⑯マスタープラン	⑰マニュアル	⑱メリット	⑲ライフライン	⑳リサイクル

まず、以下の二つの質問である。一つ一つの言葉について、AからEまで五つの選択肢を設定し答えてもらった。

★下記の20のカタカナ語を、自分が市町村広報誌（紙）で使う場合……

- (A) そのまま使う (B) 一度は日本語の解釈をつける (C) すべて日本語に換える
(D) 時と場合による (E) 答えられない

〈表6〉

	(A)(%)	(B)(%)	(C)(%)	(D)(%)	(E)(%)
アクセス	56.4	10.3	5.1	28.2	0.0
アセスメント	20.5	28.2	15.4	30.8	5.1
アメニティー	23.2	17.9	28.2	25.6	5.1
オンブズマン	53.8	23.1	2.6	17.9	2.6
ガイドライン	33.3	33.3	10.3	23.1	0.0
クローン	48.7	28.2	2.6	20.5	0.0
コンセプト	25.7	20.5	17.9	33.3	2.6
コンセンサス	5.1	28.2	35.9	28.2	2.6
シミュレーション	25.6	20.5	15.4	35.9	2.6
シーリング	7.7	23.1	41.0	20.5	7.7
スキーム	2.6	15.4	43.5	30.8	7.7
デポジット	2.6	38.4	28.2	20.5	10.3
ビジョン	33.3	15.4	15.4	33.3	2.6
ボランティア	76.9	10.3	0.0	12.8	0.0
ホームヘルパー	82.0	2.6	0.0	15.4	0.0
マスタープラン	25.6	46.2	12.8	15.4	0.0
マニュアル	56.4	15.4	5.1	23.1	0.0
メリット	64.1	5.1	12.9	17.9	0.0
ライフライン	20.5	43.6	12.8	23.1	0.0
リサイクル	84.6	2.6	0.0	12.8	0.0

五つの選択肢の中で、「そのまま使う」という回答が多い言葉は10語、すなわち「リサイクル (85%)」「ホームヘルパー (82%)」「ボランティア (77%)」「メリット (64%)」「アクセス (56%)」「マニュアル (56%)」「オンブズマン (54%)」「クローン (49%)」「ガイドライン (33%)」「ビジョン (33%)」である。

「クローン」を除けば、よく使われまた理解も比較的されていると思われる言葉である。そのまま使っても誤解されることはないということである。

「クローン」はどうか。この言葉については、使われ始めたのが比較的新しく、また一般的には難しいと言えるだろう。日本語で説明をつけるのもまた難しい。そこで、広報の担当者としては、言葉の解釈の難しさを承知の上で、やむを得ず使ってしまうということなのではないか。日本語の説明を加えればかえってややこしくなり、誤解を生む恐れがないわけではない。

この言葉に関しては、「そのまま使う」という回答が多いとはいえ半分以下であることが、よく分かる。

一方で、「すべて日本語に換える」という回答の多かった言葉は四つ。すなわち「スキーム (44%)」「シーリング (41%)」「コンセンサス (36%)」「アメニティー (28%)」である。いずれも最近よく耳にし、マス・メディアにもしばしば登場はする。が、確かに日本語としての解釈、または理解は統一されているとはいえない。そこが、広報担当者の悩みということになるのであろう。

この四つの言葉のうち、「スキーム」「シーリング」「コンセンサス」の三つは、どちらかというと専門用語に近い言葉と言えるだろう。役所言葉としてもよく使われる。したがって、他の選択肢に比較して、「すべて日本語に換える」というパーセンテージもかなり高めである。また、この三つの言葉については、「そのまま使う」という回答はいずれも一桁であった。

ちなみに、『国語審議会』（文相の諮問機関）は、平成12年6月8日にカタカナ語の審議結果として、「『コンセンサス』については『合意、総意』という日本語に言い換えることが望ましい」という見解を示している。

「アメニティー」は、専門用語に近い言葉でありながら、一般的にも使われることが多い。そのためか、「日本語に換える」という項目でのパーセンテージはそれほど高くなく、他の選択肢の回答とあまり変わりはない。「アメニティー」の場合は、「そのまま使う」という回答が23%もあることで、それが分かる。

「時と場合による」に回答の多かった「アセスメント (31%)」「コンセプト (33%)」「シミュレーション (36%)」は、この選択肢での回答率はいずれも30%台であり、各選択肢に回答が平均的に別れた言葉である。分かるようで分かりにくい、分かりにくいようで何となく分かる、という解釈ができそうだ。いずれにしても、一般の人々がすべて共通理解のできる言葉とは言い難い。

『カタカナ語』を考える

★このまま書いた場合、市町村広報誌（紙）を読む人はこれら20の言葉について…

(ア) すべての人分かる (イ) 7割程度の人分かる (ウ) 半分の人分かる
 (エ) 3割程度の人しか分からない (オ) ほとんどの人が分からない <表7>

	(ア)(%)	(イ)(%)	(ウ)(%)	(エ)(%)	(オ)(%)
アクセス	10.3	30.8	35.8	23.1	0.0
アセスメント	2.6	7.7	25.6	48.7	15.4
アメニティー	0.0	15.4	17.9	51.3	15.4
オンブズマン	10.3	33.3	38.4	15.4	2.6
ガイドライン	5.1	17.9	51.4	17.9	7.7
クローン	15.4	23.1	38.4	20.5	2.6
コンセプト	0.0	28.2	33.3	35.9	2.6
コンセンサス	0.0	7.7	23.1	61.5	7.7
シミュレーション	0.0	28.2	38.5	25.6	7.7
シーリング	0.0	5.1	12.8	35.9	46.2
スキーム	0.0	5.1	7.7	41.0	46.2
デポジット	0.0	7.7	15.4	35.9	41.0
ビジョン	2.6	38.5	28.2	25.6	5.1
ボランティア	51.3	28.2	12.8	7.7	0.0
ホームヘルパー	46.1	38.5	7.7	7.7	0.0
マスタープラン	0.0	20.5	41.1	25.6	12.8
マニュアル	10.3	51.3	25.6	12.8	0.0
メリット	23.1	46.1	30.8	0.0	0.0
ライフライン	5.1	23.1	46.2	17.9	7.7
リサイクル	30.8	53.8	10.3	5.1	0.0

わずかに20の言葉であるが、使い方、理解のされ方について人々の感じ方は、実に千差万別である。

上の結果、「すべての人分かる」とする回答が最も多いのは、わずかに二つ、「ホームヘルパー (46%)」と「ボランティア (51%)」である。この二つの言葉にしても、回答者の半数程度しか「すべての人分かる」と思っていないことがわかる。

逆に、「ほとんどの人が分からない」と多くの人が指摘する言葉は、「シーリング (46%)」「スキーム (46%)」「デポジット (41%)」である。

関連して、文化庁の『国語に関する世論調査』（平成12年1月）の結果では、ここにある言葉の中で「ホームヘルパー」「リサイクル」は90%を超える人が「分かる」と答えている。しかし、「アセスメント」「シーリング」などは2割程度の人しか理解していない。

ちなみに、NHK放送文化研究所が行った『外来語理解度全国調査』（平成11年2月 全国20歳以上の男女2,000人対象 回答率70.6%）の中で、上記の20の言葉の調査と合致する六つの言葉の認知率を見てみると、「アメニティー (61%)」「オンブズマン (75%)」「クローン (92%)」「シーリング (60%)」「デポジット (51%)」「ライフライン (77%)」である。もっとも、聞いたことはあっても意味が分からない人もかなりおり、それらの人々を除外すると、「アメニ

ティー (30%)」「オンブズマン (56%)」「クローン (83%)」「シーリング (30%)」「デ
ポジット (28%)」「ライフライン (61%)」となり、言葉によっては、聞いてはいても意味
が分かるとする人は極端に少なくなる。

分かったつもりでいても、それだけカタカナ語は使いにくいし、理解しにくいということであ
らう。

このアンケートでは、さらにこれらの20の言葉を回答者一人一人が日本語では何と解釈して
いるのかを聞いている。

以下に、それぞれが日本語でどのように理解しているかをまとめてみた。○の数字は、回答
者数である。

〈表 8〉

アクセス	接続② 接近② 行く手段 つなぐ
アセスメント	評価⑨ 調査③ 査定② 事前の調査② 環境影響評価 基準
アメニティー	環境の快適性⑤ 快適④ 心地好さ② 住環境 環境問題等 ----- 検査 潤い 生活の快適度
オンブズマン	行政監査専門員 行政監察官 行政監察員制度 行政機関の仕事 を監査する人 行政等の苦情不正に対する監査的な団体等 苦情 調査官 代理人
ガイドライン	指針④ 政策の指針③ 基本線② 指標② 日米防衛協力指針 ----- 日米安全保障条約にかかる防衛基準 日安 基準 基本方針
クローン	遺伝的に同一個体③ 複製② 遺伝子細胞 同一遺伝子が同じ細胞群
コンセプト	概念⑧ 考え方③ 観点②
コンセンサス	合意⑭ 同意④ 総意② 説明 理解
シミュレーション	模擬実験④ 模擬訓練 予想した～ 模擬体験 疑似体験
シーリング	上限④ 限界② 予算の概算要求 枠 概算要求基準 財政の上限 ----- 最高限度 予算の概算要求の枠の最高額 大方の要求基準 制限 ----- 予算枠 予算の概算要求枠 上限設定
スキーム	計画⑩ 企画② 枠組み 技術
デポジット	保証金⑥ 預金④ 預かり金② 預ける 保管 保管物 ----- 販売品等の預かり金をパッケージ返却時に返すこと
ビジョン	展望③ 構想③ 将来像 未来像
ボランティア	—
ホームヘルパー	—
マスタープラン	基本計画⑮ 総合計画②
マニュアル	手引き⑤ 説明書③ 手引書② 仕様書
メリット	利点⑤ 功績
ライフライン	電気や水道など⑥ 生命線⑥ 生活の生命線③ 生活を支える導管 ----- 生活に関する～
リサイクル	再生利用 再生

『カタカナ語』を考える

この結果、回答を寄せた39人のうち言葉の解釈として多くの人がほぼ一致したのは、「アセスメント=評価」「アメニティー=快適さ」「ガイドライン=指針」「コンセプト=概念」「コンセンサス=合意」「スキーム=計画」「デポジット=保証金」「マスタープラン=基本計画」「メリット=利点」の九つである。

このように、多くの人が共通理解を示す言葉については、どちらかと言えば、日本語で書いたり話したりすることが望ましいのではないかとと思われる。

ちなみに、ここには、ある一定の統一的解釈が出ているのであるが、本来の英語の意味合いはどうか。英和辞典(『新クラウン英和辞典』三省堂 '91.12.30第4版)で見てみることにする。

〈表9〉

アセスメント= (財産、収入の) 評価、 (一般に) 評価
アメニティー= 快適、心地好さ。 (人に好感を与える) 優しさ、上品さ。
ガイドライン= 案内線。 (ガイド= 指針、道しるべ)。
コンセプト= 概念、考え。
コンセンサス= (多数の人々の意見・感情などの) 一致。
スキーム= 計画、設計、案。
デポジット= 寄託、預金、手付金、保証金。
マスタープラン= 基本計画。
メリット= 価値、長所、美点。功績、功罪。

「ガイドライン」を除けば、本来の意味合いから大きく外れた解釈はない。

次に、カタカナ語辞典はどう解釈しているのか。『コンサイス カタカナ語辞典』(三省堂 '94.9.10) で見てみることにする。

〈表10〉

アセスメント= 評価、査定。
アメニティー= 生活の快適度、都市生活の環境。
ガイドライン= (一般的に) 基本線、指導目標〈現代的用法〉。
コンセプト= 考え、概念。
コンセンサス= 意見の一致、合意。
スキーム= 案、計画。
デポジット= 預かり、保証金。
マスタープラン= 親計画、基本となる計画。
メリット= 長所、利点〈現代的用法〉。

こちらも問題はなさそうだ。

なお、もっとも分かりやすいと思われる「ボランティア」や「ホームヘルパー」については、日常このまま使うことが多いせいか日本語の解釈を書いてくれた人は一人もいなかった。

また、「リサイクル」についても、『国語に関する世論調査』で90%を超える人が理解できるとしているように、ここでも「再生利用」「再生」という言葉が二、三あるだけで、当たり

前過ぎる故かほとんどの人が白紙であった。

「オンブズマン」「ガイドライン」「シーリング」「デポジット」などは、さまざまな使い方があろうせいか、解釈もまちまちである。これでは、一般住民に説明するのに混乱をきたはしないかと思う。

回答（解釈）が別れている「ライフライン」は、平成7年1月の阪神淡路大震災を契機に、頻繁に使われるようになった言葉であるが、ここに、この言葉に関して新聞が伝えた興味深い記事が三つある。少し長いがここに引用する。

初めは、読売新聞の二つの記事である。

〈読売新聞・平成7年2月23日〉

「【ニューヨーク21日＝共同】21日付ニューヨーク・タイムズは、写真入りの長文記事で日本での和製英語の氾濫ぶりを取り上げ、『外国のコメや自動車を輸入したがる日本人も、外国の言葉を吸収することには熱心だ』と皮肉たっぷりに報じた。最近の日本の流行語は『ヘアヌード』や『ライフライン』など、英語を母国語とする人々も解説されなければ分からない言葉が多いと指摘……」

〈読売新聞・平成7年2月25日『よみうり寸評』〉

「『ライフライン』『ヘアヌード』などを、ニューヨーク・タイムズ紙が、英語国民の理解できない和製英語として列挙した。『ライフライン』という英語がないわけではない。その意味は『①救助船から遭難船に送り込まれる細索②潜水員を揚げ降ろしする命綱③軍事・経済的に不可欠の輸送経路④手相の生命線など。だが、和製英語の『ライフライン』は以上とは異なる。それは『電気・ガス・水道・電話など都市生活の機能を保つ生命線』といった意味だ。……和製英語の『ライフライン』は他の日本語で代用しにくい便利な言葉だ。私たちは日本語で表現しにくい場合、安易にカタカナ語に頼ってしまう傾向がある。今後も『ライフライン』を使う場合には少なくともそれが『英語国民の理解できない和製英語』であることを認識しておく必要がある」

このように、読売新聞はニューヨーク・タイムズの記事を引用しながら、「ライフライン」を、日本で使われている意味合いは和製英語であると強調しているのである。

ところが、後に大分合同新聞がこの「ライフライン」を取り上げ、次のように書いている。

〈大分合同新聞・平成7年6月11日『英語交差点 lifeline』〉

「阪神大震災のニュースの洪水の中で、ライフラインという片仮名单語が頻々と登場した。電気、ガス、水道など日常生活に欠かせないエネルギー供給ネットワークのことを総体としてライフラインというのである。ライフラインの英語はlifelineであるが、これを生命lifeと線lineを組み合わせた和製英語だと思い込んでいる人が少なくない。だが、実際には米国の新聞・雑誌でも電気、ガス、水道のような経済的インフラストラクチャーの意味で使われており、普通の英語であることが分かる。ライフラインlifelineにはもともと生命線、命綱、救命ロープなどの意味があるから、それが電気、ガス、水道などの比喩的表現となり、今ではそれが普通の単語として定着したのだろう。lifelinesと複数で使うことが多い」

『カタカナ語』を考える

この大分合同新聞の記事は、和製英語ではないことを強調し米国では普通の単語として使われていると言う。果たして、どちらの記事が正しいのか、読者としても判断に迷うところである。というよりは、「ライフライン」一つを取り上げてもこのように解釈の違いがはっきり出てくるわけで、カタカナ語については人それぞれ違う解釈をしている場合が多いのではないかとと思われる。

それでは、辞典類がこの「ライフライン」をどのように説明しているのか、以下に示すことにする。

〈ライフライン lifeline〉

〈表11〉

英和辞典	救命綱→人命救助に用いる各種の綱。
カタカナ語辞典	①命綱。救難索。②死活にかかわる生命線。物質補給路。都市生活を守る電気・ガス・水道などの補給線についても言う。
ザ・ゲンダイ	①都市生活を送るのに必要な生命線。電気、水道、通信など。 ②命綱。
広辞苑	①命綱。救命索。②都市生活に不可欠な水道・電気・ガスなどの供給システム。
新明解国語辞典	都市生活者の生命維持に欠くことのできない電気・ガス・水道などの供給路や通信・輸送の手段。
現代国語辞典	①命綱。②生活に不可欠な物資等の補給路。生命線。
現代用語の基礎知識	①命綱。生命線。②生活線。電気、ガス、水道などをいう。 ③「いのちの電話」。緊急電話相談。

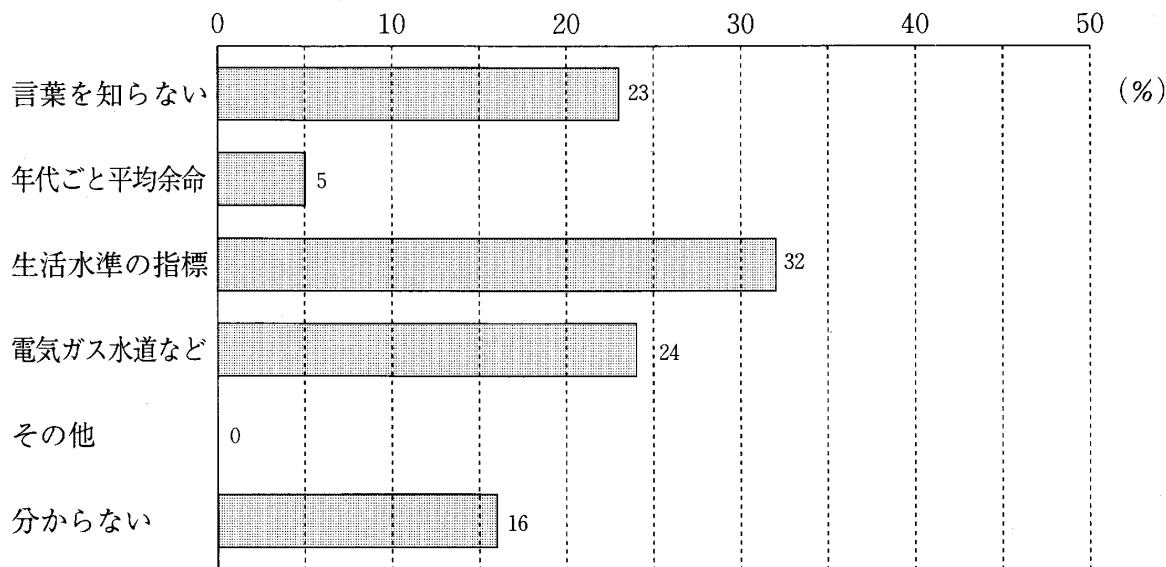
まさに、さまざまな解釈がここにある。

市町村広報担当者の解釈がさまざまだったことはいなづける。

ちなみに、先に引用したNHK放送文化研究所の調査によると、この言葉の解釈と理解度は次のようになっている。

〈ライフラインの理解度〉

〈図5〉



このアンケートは、あらかじめ答えを設定して選んでもらったものである。

先にも触れているが、「この言葉を知らない」「分からない」を合わせると39%。逆に61%の人が「聞いたことがある」あるいは「意味が分かる」としているのだが、正しい答え「電気・ガス・水道など」は24%しかない。

「年代ごとの平均余命」や「生活水準を表す指標」などは紛らわしい答えである。ことほどさように、カタカナ語の理解は不十分と言わざるを得ない。

それでは、市町村広報担当者を対象にしたアンケートで使用した20の言葉が、いつごろから一般に使われるようになったのか、また、それぞれの言葉について国語辞典はどのような語釈をとっているのか調べてみることにする。

参考にしたのは、『広辞苑』（岩波書店）である。

〈表12〉

	第一版	第二版	第三版	第四版	第五版
	S.30.5.25	S.44.5.16	S.58.12.6	H.3.11.15	H.10.11.11
アクセス	—	—	(~権)公衆が新聞やテレビなど…	情報に対する操作の総称。特にコンピュータで記憶装置や周辺装置にデータの読み出しや書き込みをすること。交通手段の連絡。	(四版に同じ)
アセスメント	—	—	〈環境アセスメント〉	(三版に同じ)	環境~環境影響評価に同じ 開発が環境に及ぼす影響の内容と程度および環境保全対策について事前に予測と評価を行い、保全上必要な措置の検討をすること。
アメニティー	—	—	—	都市計画などで求める建物・場所・景観・気候など生活環境の快適さ。	(四版に同じ)
オンブズマン	—	—	議会により…~機関	(三版に同じ)	議会・市長などにより任命され、任命者から独立して行政活動を調査し、国民・市民からの苦情を処理する機関。スウェーデンに始まる。新聞業界など民間でも行われる。
ガイドライン	—	—	政策の指針、指導目標	(三版に同じ)	(三版に同じ)

『カタカナ語』を考える

クローン	—	—	1個の細胞または生物から無性生殖的に増殖した生物の一群。また、遺伝子組成が完全に等しい遺伝子、細胞または生物の集団	(三版に同じ)	(三版に同じ)
コンセプト	—	—	—	概念。企画、広告などで全体を貫く統一的な視点や考え方	(四版に同じ)
コンセンサス	—	—	意見の一致。合意。特に、国家の政策について言う。	(三版に同じ)	(三版に同じ)
シミュレーション	—	—	物理的・生物的・社会的等のシステムの挙動をこれとほぼ同じ法則に支配される他のシステムまたはコンピュータの挙動によって模擬すること	(三版に同じ)	(三版に同じ)
シーリング	—	—	—	(天井、上限などの意)一定の限度を設けること。先進国が発展途上国からの輸入品に一定限度の特恵関税を適用すること。日本の予算編成に当たって概算要求の上限を前年度予算額の一定の比率内にすること。	(四版に同じ)
スキーム	—	—	—	—	計画、案、図式
デポジット	—	—	保証金。予約金(～制度)食料などを販売する際、あらかじめ一定の金額を上乗せし空の容器を返せば当該金額を返却する制度	(三版に同じ)	(三版に同じ)
ビジョン	—	視覚・幻影心に描く像・未来像	(二版に同じ)	(二版に同じ)展望、見通し	(四版に同じ)
ボランティア	—	義勇兵 自らすすんで事業に参加する人	(二版に同じ)	(二版に同じ)	(二版に同じ)奉仕者
ホームヘルパー	—	—	日常生活を営むのに支障がある者の家庭を訪問して介護などの世話をを行う者。家庭奉仕員。	(三版に同じ)	(三版に同じ)
マスタープラン	—	基本計画、基本設計	(二版に同じ)	(二版に同じ)	(二版に同じ)

マニュアル	—	—	(手の、手で動かすの意) 手引、便覧、必携	(三版に同じ) 必携→取り扱い説明書	「手の」「手動の」の意。特に自動車で変速装置が手動式であること。手引き、便覧、取り扱い説明書
メリット	価格・賃金などに原則以外に差異をつけること。 使用価値、経済効果、商品の価格決定の品位	価値・功績・長所 価格・賃金などに原則以外に差異をつけること	(二版に同じ)	価値・利点・長所・功績	(四版に同じ) メリット制の略 価格・賃金・保険料などに原則以外に差異をつけること。例えば、保険事故の発生率に応じて保険料率に差異をつける制度など。
ライフライン	—	—	—	命綱・生命線 電気ガス水道の供給システム	命綱・救命索 都市生活に不可欠な水道・電気・ガスなどの供給システム
リサイクル	—	—	—	(資源の節約や環境汚染防止などのために)不用品・廃棄物などを再生利用すること。	(四版に同じ)

『広辞苑』の第一版は、昭和30年5月に刊行された。日本がまだ戦後の混乱期を脱していない時期、高度経済成長へ進む前である。そのせいか、この報告に取り上げた20の言葉のうち、この第一版に登場する言葉は、わずかに「メリット」だけである。その語釈は、「①価値・賃金・保険料などに原則以外に差異をつけること、②使用価値・経済効果の意。商品の価格を決定する品位」とある。今、普通に使われている意味「長所・利点」などは出てこない。経済専門用語としての語釈を読み取ることができる。ちなみに、「長所」は第二版（昭和44年）から、また今一般的に使われる「利点」は第四版（平成3年）になってようやく採用されている。

昭和44年刊行の第二版には、新たに「ビジョン」「ボランティア」「マスタープラン」の三つが現れる。

この段階で「ビジョン」の語釈は「視覚・幻影、心に描く像・未来像」とされ、第四版（平成3年）でようやく今普通に使われる「展望・見通し」などが語釈に加わることになる。

「ボランティア」は、「義勇兵。自ら進んで事業に参加する人」とされ、その後、第五版で「奉仕者」が付け加えられただけで語釈の上で大きな変化はない。

「マスタープラン」も当初の「基本計画・基本設計」に変わりはない。

第三版は、昭和58年の刊行であり、ここに新たに10の言葉が登場する。昭和40年代以降、日本が経済、政治、社会とさまざまな面で大きく変化し動いてきたことを、こうした新しい言葉の誕生で読み取ることができる。

平成に入って登場した「アメニティー」「コンセプト」「シーリング」「ライフライン」「リサイクル」などは、まさに時代を象徴する言葉と言える。新しいから、また人による言葉の解釈もさまざまだと言えるのかもしれない。

これらの言葉の中で最も新しいのは「スキーム」である。「スキーム」については、広報担

当者の多くが、その解釈にほぼ一致をみた言葉であるが、果たして辞典類はどのように解釈しているのか。一般的には、やや難しい言葉と思われるのでそれを見とみることにする。

〈スキーム scheme〉

〈表13〉

英和辞典	①計画、設計、案。②組織、機構、配合。③陰謀、策動。④概要。
カタカナ語辞典	案、計画、組織、図式。
ザ・ゲンダイ	①案、計画、組織、図式。②実現の見通しのない、計画や構想。
広辞苑	計画。案。図式。
新明解国語辞典	—
現代国語辞典	—
現代用語の基礎知識	(組織だった) 計画。体制。概要。図式。絵図。

市町村広報担当者の多く(10人)は「計画」と解釈している言葉であるが、英和辞典の語釈といくらかずれのあるものも見られる。したがって、この言葉を使うとき何をイメージして使うのかによって受け取る側に微妙な差が出てくるのではないかと思える。なお、この「スキーム」については、日本語として使われるようになったのは比較的新しく、まだ定着はしていない。そのことは、文化庁が平成11年1月に調査した日本語とカタカナ語のどちらが分りやすいかという問いに対する答えとして、94%の人が「計画」のほうが分りやすいと答えていることでよく分る。カタカナ表記の「スキーム」をよしとする人はわずかに2%であった。

V. カタカナ語はどうあればいいのか

マス・メディアの側は、先の投書が指摘するカタカナ語の多用についてはどのような見解をもっているのだろうか。

朝日新聞は、『読者と新聞(読者情報室から)』欄(平成5年1月24日)で次のように言っている。

「最近、年配の読者を初め、若い世代からも『紙面にカタカナ語が多く、意味がよくわからない』『もっと日本語を大切にし、外国語には意味がわかるよう日本語の説明をつけてほしい』という要望が当室に寄せられるようになりました。…。本社でも日頃から、カタカナ語の乱用を戒めてきましたが、官庁などの発表資料にカタカナ言葉が多く、ついそのまま記事にしてしまうケースなどもあって…。」

また、NHKは、『NHKことばのハンドブック』(’96.3.24第1刷)でカタカナ語について次のように述べている。

「…。一般に外来語・外国語には意味の分かりにくいものが多い。それゆえ、放送で外来語・外国語使用に関していちばん注意する必要があるのは、視聴者がそれらの言葉を理解できるかどうかである。ニュースなどの場合は、内容の理解に直接かかわってくるので、外来語・外国語の使い方には特に慎重でなければならない。分かりにくいものには必ず言い添えや説明をする。在来の日本語があるのに、外来語・外国語を使うようなことはしない、というのが、放送

でのいわば暗黙の了解事項である。…。」

これらの考え方は、放送局を含めたマス・メディア各社に共通するものだと考えていい。しかし、カタカナ言葉の乱用は避ける、読者に分かりやすい言葉を使うと言いながら、国際化・情報化という時代の流れもあるのか、先の大分合同新聞の紙面でも見るようにカタカナ語の使用は決して少ないとは言えない。いや、むしろこのところ増え続けていると言っても過言ではない。マス・メディア各社にあっては、先に示したような基本姿勢はあるにしても、使わざるを得ない実態にあるというのが正直なところであろう。冒頭にもふれているが、この傾向はさらに続くと思われる。

上記の中に、「…官庁などの発表資料…」という表現があったが、かつて、小泉総理大臣が厚生大臣だった平成7年、厚生省内に「用語適正委員会」なるものを設置し、特に分かりにくいと言われる福祉関係のカタカナ用語について、その恩恵に預かるとされる人々の立場を考慮し、検討を加えたことがあった。

その要点を記せば「①極力使用を避け日本語に言い換える（ドナー→臓器提供者、ケアプラン→介護サービス計画）、②工夫の上使用する。ただし、日本語訳を括弧書きにするなど（インフォームド・コンセント「説明と理解」、レセプト「診療報酬明細書」）、③そのまま使用するもの（エイズ、リハビリ）」。以上の三通りで今後検討を進めるというものであった。

そして、平成9年9月、「国民の誤解を避けるため、公文書や報告書の作成にはできる限り日本語表記に努めること」と省内に通知した。

このようなカタカナ語の見直しは厚生省にとどまらず、各自治体でも行われてはいる。が、増え続ける新語にその見直しが追いつかないというのが実態であろうし、また適当な日本語が見出だせないということもあろう。

ところで、平成4年5月、大分県は「役所ことば見直し検討委員会」を発足させ、いわゆる県の公文書で使われる言葉の見直しを始めることにしたと、ニュースで伝えられた。これは、県総務課が県民と職員を対象に実施したアンケート調査に基づくもので、アンケートでは、県の公文書類を「理解できる」とした県民は68%で、あとの31%が「分かり難さ」を訴えたと言う。このアンケートに関連して、公文書類に使用されるカタカナ言葉が多すぎるという注文が目立ったとされている。その時指摘されたカタカナ言葉は、例えば「アメニティー」「ソフトプロバンス」「インターローカル」「クオリティー」「ボーダーレス」など。

こうした大分県の例のみならず全国各自治体で、公文書に使用するさまざまな言葉の改善に取り組んでいる実態がしばしば報道されてきた。

先の厚生省の改善通知以降、全国的にこの傾向はさらに進んでいるようだ。

そのことを調査した結果として、関西大学の陣内正敬教授が「全都道府県・政令市の計59自治体のうち33の自治体で役所言葉を見直す中でカタカナ言葉を改善する方向で検討を進めている。が、大半は見直しを総論的に記述しただけで、語釈や注釈例を示したのは11の自治体に過ぎない。…」として、以下のような4自治体のカタカナ語に関する判断（各自治体の手引書）を表示している。

〈表14〉

カタカナ語	日本語の解釈	青森県	埼玉県	富山県	鳥取県
アイデンティティ	同一性	△	—	○	×
アクセス	交通手段 経路	△	×	○	○
アメニティ	快適性	△	—	×	△
エリア	区域、地域	△	×	—	○
ガイドライン	指針、指標	△	×	×	×
コンセプト	理念、考え方	×	×	○	×
コンセンサス	意見の一致	△	×	○	×
シーリング	予算要求枠	○	—	×	△
ニーズ	要求、需要	○	×	○	○
ファジー	あいまいな	△	—	×	—
フレーム	枠、骨組み	△	×	×	×
シミュレーション	模擬実験	△	—	○	△
ポテンシャル	潜在能力	△	×	×	×
マンパワー	人材、労働力	△	×	—	△
マスタープラン	基本計画	△	—	×	×
マニュアル	手引書	△	—	○	×

○使用可能 △注釈が必要 ×変更が必要 —判断無し

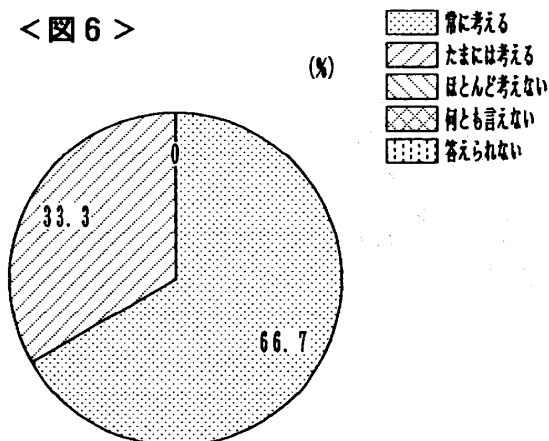
(以上 読売新聞・平成10年7月4日から引用)

ここで検討の組上に上っているカタカナ言葉は約千語とされるが、見解が一致する言葉はごくわずかであり、その多くは、使用可否の判断基準が自治体によってばらばらであるというのが実態のようだ。しかし、いずれにしても自治体が市町村民を対象に発信する情報が市町村民にとって分かりにくいものであってはならないはずだし、誤解を生むような表現を使うことは厳に慎むべきできであろう。上記に関連して、市町村広報担当者の考えはどうか。

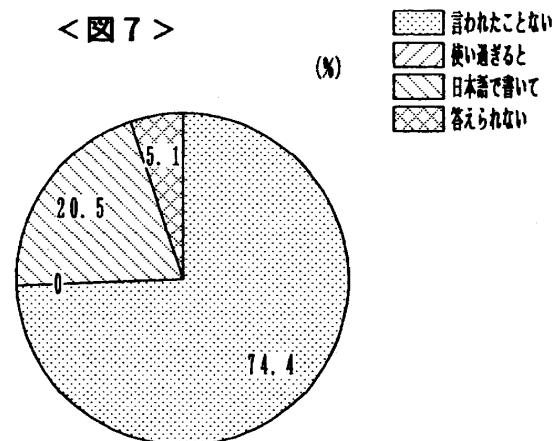
★カタカナ語を使う場合、読み手が分かるかどうか考えていますか。

★カタカナ語の使用について市町村民から何か言われたことはありますか。

<図6>



<図7>



前にも述べているが、〈図6〉で分かるとおり市町村広報担当者は常に読み手（市町村民）の立場に立ってものごとを考えていることがよく分かる。

一方、〈図6〉のように読み手に対して努力を払っても、市町村広報担当者と市町村民との間には、この回答ではそれほど多くはないが、例えば「できるだけ日本語で書いてほしい(21%)」などという回答のように、そこで使われる言葉に関しては感覚的なずれとでも言えるようなものがあることが分かる〈図7〉。

その上で、今後、ますますカタカナ語が増えるであろうと予想される中で、そのことを踏まえカタカナ語の使用についてどのように考えるのか、次に聞いている。

★今後、日本語の中のカタカナ語はもっと増えると思われませんが、その場合…。〈表15〉

①時代の流れだからそのまま使う	7.0%
②市町村民のことを考えて日本語で説明を加えるなどする	55.8
③できるだけ日本語に置き換えていきたい	20.9
④新しいカタカナ語はできることなら使いたくない	7.0
⑤何とも言えない	9.3
⑥答えられない	0.0

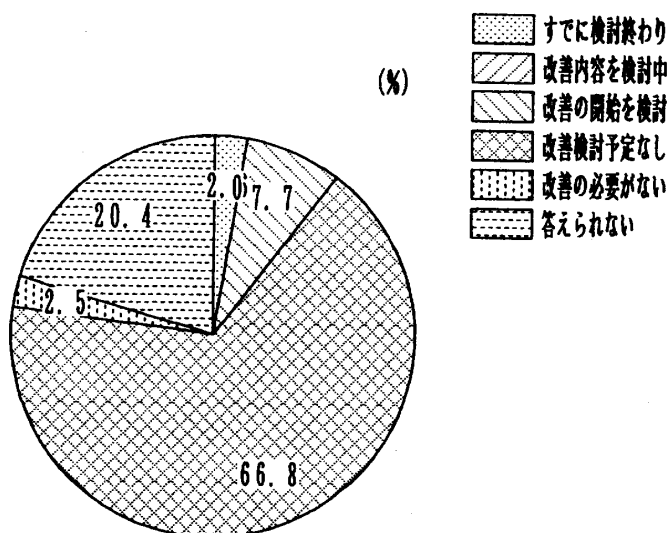
文化庁の『言葉に関する世論調査』（平成12年1月）でも、「官公庁の広報やパンフレットなどにおける外来語使用について」という、上の質問と同じようなものがある。その結果は

〈表16〉

①外来語・外国語を使うことはやむを得ないがなるべく注釈をつける	42.7%
②外来語・外国語は日常生活で使われているものに限って使う	36.8
③外来語・外国語はできるだけ使わない	10.4
④外来語・外国語を積極的に使う	5.0
⑤その他	0.6
⑥分からない	4.5

★自治体によっては、公文書や報告書の作成に当たり、カタカナ語の使用等表現の改善に努めているところもあるようですが、あなたの所ではいかがでしょうか。

〈図8〉



『カタカナ語』を考える

日常の言葉の使い方は別にして、やはり役所のカタカナ語の使用については、〈表15、16〉で見られるように、広報担当者はかなり注意をはらっていることが分かる。が、先の調査でも分かるように自治体での言葉の改善の動きは、あるにしても具体的にどう進んでいるのか、と問われるといささか心許ないと言わざるを得ない。

その結果が〈図8〉である。県の段階では、改善に向けてさまざまな動きがあるのだが、市町村の広報に限って言えば、「改善を検討する予定はない」が67%となり、特にこれといった動きはない。〈表15、16〉のように気を使いつつ従来どおりのやり方で今後特に問題が生じることはないと考えているようだ。

それでも、一部ではあるが、すでに「改善を終えている（3%）」ところもある。

ただ、「答えられない（20%）」という答えの中に市町村としての何か回答がありそうな気がする。

VI. まとめ

今から20年ほど前、読売新聞の論壇（昭和59年2月24日）に外務省研修所長（当時）の野田栄二郎氏が「日本語を大切にしよう」というタイトルで次のように書いている。

「…。6年半近くの在外勤務から帰国後、ある百貨店に入って外套（がいう）の売り場はどこかと尋ねたところ、売り子の女性は怪訝な表情で数刻の沈黙の後、『コート』のことですか、と質問した。『外套』という国語はもはや使われていないようである。店内各階の商品案内を見ると、カタカナの外国語がむしろ主流をなしている。百貨店の商品表示だけでなく、テレビでも、新聞あるいは雑誌でも、外国語ないしそれらしきものが氾濫している。…。カタカナの外国語ないし似て非なる外国語が乱用されている現状は、どうみても極端であると言わざるをえない。名詞も動詞も形容詞も外国語に置き換え、また安易な和製英語の使用を許していればあとに何が残るのであろうか。…。国語こそは、国民の特に世代間の意思疎通のための不可欠な手段であり、国民の文化的団結の基礎をなすものである。…。せめて官庁だけでも、妙な外国語やいわゆる和製英語の整理をしたいものである。…。」

筆者は、当時この記事を読みその通りだと思い、また特に、外国暮らしの長い人の発言だけに説得力のあるものだとえらく感心したことを覚えている。

その読売新聞が「進む英語化」というタイトルをつけ、100年後の日本語を想定して次のような記事を書いている（平成10年8月29日）。

「太郎さん（曾祖父112歳）は、最近、時々遊びに来る曾孫の英明君（一人息子10歳）の言うことが、どうも理解しにくくて困る。

『るっくるっく、ママ！ ボク、げっとったよ、ポケモン』などと携帯ゲーム機で遊びながら叫んでいる。百年前から、日本語、英語まじりの言い方はあっても、せいぜい『見て見て！ ポケモンをゲットしたよ』といった程度だった。英明君の話し方は語順もおかしい。

夏江さん（祖母77歳）は、学生時代に言語の変化を勉強した。そこで太郎さんは英治さん（祖父80歳）の家に夕食に招かれた日、英明君の話し方について夏江さんに聞いてみた。

『英語の影響によって、英語でも日本語でもない“中間言語”ができることを“ピジン化”。

『ゲットした』というのがそうよね。さらにピジン以後の世代の言葉を“クレオール”っていうんです。日本語も今クレオール化が進んでいるんですよ』

太郎さんはその説明に満足したものの、太郎さんの世代としては、このままでは日本語は完全に英語になると、やはり心配である。……」

やや誇張した記事とはいえ、日本語の変化については今後どのようなようになるのか、現段階で定かではないが、今増え続けるカタカナ語を見るにつけ、そして多くの人々のそのことについての無関心さを見るにつけ、読売新聞の記事ではないがカタカナ語を中心とした日本語の将来について、いささかの疑問を持たざるを得ない。

ところで、平成6年4月、海の向こうのフランスでジャック・トゥーボン文化・フランス語圏大臣が立案した「フランス語使用に関する法律」が制定された。昭和51年にも同じような法律が制定されているが、今回ののは、先に成立した法律の内容をさらに厳しくしようというものである。

今回の法律の特徴は『①フランス語使用の義務付け範囲の拡大、②外来語使用の禁止、③厳しい罰則規定、④多言語教育の義務付け』などである。一言でいえば、フランス語以外の言語の使用に一定の歯止めをかけようとするものである。

ここに言ういわゆる「フランス語使用に関する法律」が提案された時、日本の各マス・メディアもこれを記事として取り上げている。

中で、読売新聞は夕刊の「よみうり寸評」で次のように伝えた。以下に、それを引用する。

「『フランス語以外は使ってはならない』と定めた、すさまじい『フランス語使用に関する法案』が今春、フランス国会で可決される見通しだ。対象とされるのは、政府、企業、テレビ・ラジオなどで使用されるほぼ全原語。法案が成立すると『ヒット・パレート』などというラジオの人気番組は改名を迫られる。……フランス国会は昨年12月、アメリカからの映画、TV番組、音楽の輸入数量を制限し課税する法案を可決した。ラジオで放送される歌の最低40%はフランス語と定めた。その背景にはフランス語の地位低下に対するフランス人の危機感がある。かたや私たち日本人はカタカナ言葉の輸入につき実に野放図。日仏の中間当たりが妥当なところか。……」（平成6年3月19日）

フランスは、つまり「言葉は文化」であるという考え方にに基づき、外来語の移入によるフランス語の乱れに歯止めをかけ、ひいてはフランスの文化をしっかりと守ろうと考えているのである。

古来、多くの外国語また外国の文化を取り入れながら独自の日本文化を作り上げてきたわが国で、フランスのような法律を制定することはおそらくできない相談ではあろうが、野放しの外国語の移入は、ある一定の限界に来ているのではないと思われる。

このまま推移すると、日本語がやがて崩壊することにもなりかねない。

〈参考文献〉

『ことば読本「外来語」』（河出書房新社 '91.2.22）

朝日新聞記事

読売新聞記事

『カタカナ語』を考える

大分合同新聞記事

『現代用語の基礎知識2001』（自由国民社 '01.1.1）

『広辞苑一版・二版・三版・四版』（岩波書店）

『新明解国語辞典』（三省堂 '97.11.3第五版）

『集英社国語辞典』（集英社 '93.2.25第一版）

『新潮社現代国語辞典』（新潮社 '00.2.5第二版）

『日本語百科大事典』（大修館書店'90.9.10第四版）

『コンサイスABC略語辞典』（三省堂 '94.9.10第1版）

『コンサイス カタカナ語辞典』（三省堂 '94.9.10第1版）

『デイリー新語辞典』（三省堂 '00.7.20第1版）

『外来語カタカナ語辞典』（金園社 '93.2.1初版）

『ザ・ゲンダイ』（講談社 '92.6.30）

『新クラウン英和辞典』（三省堂 '77.11.1第4版）

『言葉に関する問答集 外来語編'97.3』（文化庁）

『言葉に関する問答集 外来語編（2）'98.3』（文化庁）

NHK『放送研究と調査』（NHK放送文化研究所）

NHK『ことばのハンドブック』（NHK放送文化研究所 '92.3.25）

- ◎なお、この調査研究に当たり、財団法人・大分放送文化振興財団から平成12年度の助成を受けた。厚くお礼を申し上げます。
- ◎また、この調査・研究に当たり、大分県・大分県内各市町村の広報担当者に多大なご協力をいただいた。ここに深くお礼を申し上げます。